

新型コロナ感染対策時の中国オンライン学校

2020年4月

twitter 「china tips by myokoi」 主持人 横井正紀
myokoi6212@gmail.com

新型コロナ感染対策として学校が閉鎖され、子供たちは自宅待機を余儀なくされた。しかし、自宅待機発令の三週間後にはオンライン教育環境が提供され、各省や直轄市ごとにユニークなオンライン教育が始まった。オンライン教育というと日本ではPCやタブレットのイメージが先行するが、新型コロナ感染対策時の中国オンライン教育は「いまあるツールをうまく融合させて使う」という方針で組み立てられ、そこに支援企業が参入し、一気に「オンライン学校」なるプラットフォームが立ち上がった。ここでは上海の小学校の「オンライン学校」の実態を取り上げながら、中国が俊敏に行った取り組みを紹介する。



■基本はテレビのオンライン学校

オンライン学校では、どのように学習をすすめるのか。その様子を時系列で書くと以下のようなになる。

上海市 **小学二年级** 在线教育播放时间表

时间	周一	周二	周三	周四	周五
08:50 开始	升旗仪式				
09:00-09:20	语文	语文	语文	语文	语文
09:40 开始	广播操				
10:00-10:20	数学	数学	数学	英语	数学
10:40 开始	眼保健操				
11:00-11:20	体育与健身	体育与健身	体育与健身	道德与法治	体育与健身
	午休				
14:00-14:20	英语	语文	语文	语文	语文
14:40 开始	广播操				
15:00-15:20	道德与法治	唱游	美术	唱游	美术
15:40 开始	眼保健操				
16:00-16:20	科教版自然	远东版自然	科学与技术	科教版自然	远东版自然
17:00-17:20	科学与技术				



1) TVで学習

これは、上海市小学校2年生のオンライン授業の放送予定である。20分を一コマにして、各学年ごとにTVで授業を20分間放送する。1日6教科あり、体育や音楽まで盛り込まれている。子供たちは自宅でのTVをみながら学習する。

2) ネットで送られてくる宿題に回答

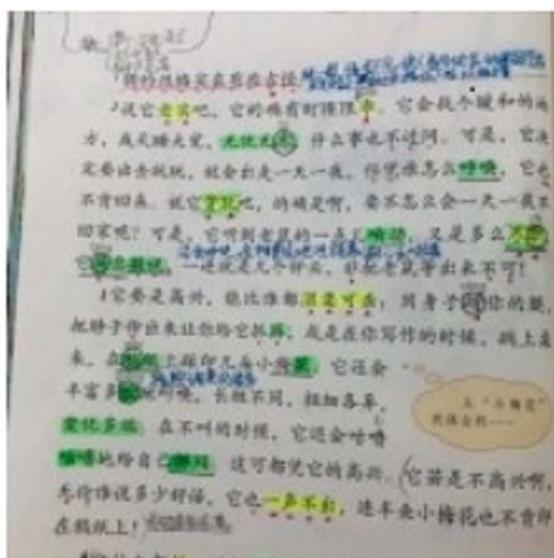
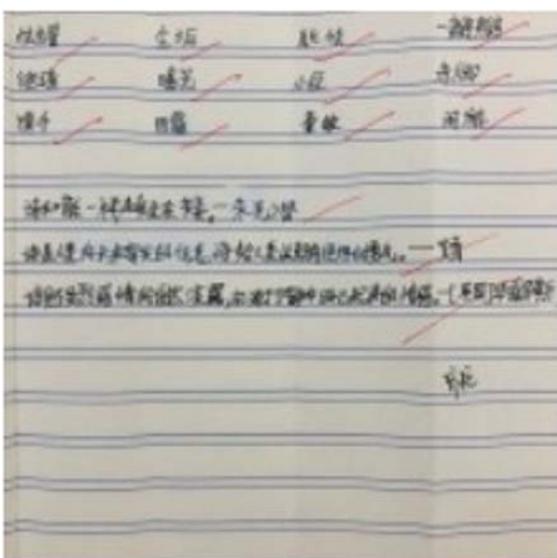
毎日宿題が自分のアドレスに送られてくる。それをプリントアウトして、印刷した紙に手書きで回答する。

3) 宿題の提出

上記2)で行った宿題の解答用紙を、スマホやPCのカメラで写真を撮り、それを担任の先生にネットを使って送付する。メール添付や微信(中国のSNS)を使って送付することが一般的だ。

4) 宿題の添削

上記3)で先生の手元に届いた解答用紙に、先生が添削する。PC上のツールを使って行っている場合が多いようだ。そして添削後の解答用紙を各子供たちに返信する。



5) 優秀回答の表彰

上記3)で優秀な回答をした子供たちは皆に紹介され、表彰される。これが子供たちのモチベーションになっているのかもしれない。

6) 親が学校と連絡を取る場合などには、釘釘(社員および企業が日常管理プラットフォーム)を利用している。

■普段使いのツールを使った環境構築

上述のように、オンライン学校で学習を進める子供たちのプロセスは、オンラインとオフラインが融合したものであり、日本で散見されるPC偏重のデジタル世界のネット教育環境とは違う。このようなプラットフォームになった理由は、「緊急時であるが故に、手数を多くかけずに、迅速に立ち上げられる方法」に、皆が知恵を絞ったためである。加えて、中国の一般の生活の習慣を踏襲してプロセスができていますので、比較的ストレスなく

各家庭がこの方法に順応できた点も見逃せない。具体的に中国で一般の人が接しているツールや習慣を眺めてみると次のようになる。

1) TV

中国は衛星放送やケーブルTVが発達しており、各省や都市毎に10チャンネル程度がある。違う都市の衛星放送も視聴できるので、自宅で見聴できるチャンネル数は100チャンネル以上ある家も少なくない。上海の場合は、上海メディアグループ (SMG) が東方衛星TVを運営しており、今回の上海のオンライン学校は、このチャンネルが使われている。

2) 微信 (Wechat: 中国版LINE)

友人同士はもちろん、中国の日常的なビジネス場面でも電子メール以上によく使われる中心的なツールでもある。情報交換だけではなく、決済機能としても利用されている。写真やファイルを添付して送ることも簡単である。また、微信はPCとスマホを連動して使うことも簡単でLINEと比較して格段に便利である。

3) 釘釘 (DingDing)

会社の総務的プラットフォームとして定着している企業向けのAPPである。出勤管理、決済管理、稟議管理など一般に会社の総務機能が集約されている。更にプロジェクト管理や顧客管理などの営業ツールも充実しており、社員の日常管理、業務の日常管理には欠かせない。これは阿里巴巴 (アリババ) が開発し、一般的な利用に関して登録は必要であるが、無料で利用できる。日本の会社で同様な機能を提供するAPPは、月額一人当たり



1000 円の費用を徴収するものでも安い方で、コストパフォーマンスはもはや比較対象ではない。私も毎日利用している。例えば、出退勤管理はスマホで行うが、スマホで出勤ボタンを押した場所の位置情報も同時に会社に報告される。つまり、在宅で勤務しているのか、直行したのかなどが管理者がすぐに認識できる。新型コロナ感染予防が叫ばれると、すぐに「社員健康」というスレッドが立ち上がり、そこに、体温や体調など必要な情報を書き込み、会社に登録できるような仕組みが登場した。もちろん無料である。この釘釘の仕組みを使って、学校のクラスの親が登録され、親の集団を一つの会社のように見立て、釘釘にある様々な機能を利用して充実したコミュニケーションを実現した。ちなみに、最近はこの釘釘の中にもオンライン教育機能が備えられている。

4) 写真をとって送る

「紙にサインをして写真を撮って送る」といった行為は、日常茶飯事だ。判子やサインの文化はアナログである。このような紙の資料を写真に撮ってデジタル化するという単純な作業は、行政府への提出物などでも一般的である。よって、宿題の回答は手書きで行い、それを写真で送る行為そのものは特殊な作業ではなく、日常的な行為である。

5) オーディオブックの普及

中国ではオーディオブックが普及しており、テキストを「読む」のではなく「聞く」習慣が発達している。渋滞時に運転しながら本を「聞く」、オンライン教育で内容を「聞く」といったスタイルは大人の世界で普及しており、日常的な行為である。その時の1単元の長さは8~20分である。この経験値が今回のオンライン教育の一コマの時間にも活かされたように推測する。中国の企業研修コンテンツはオーディオブック形式が多く、スマホで聞きながら学習するスタイルが定着している。

■プリンター在庫が一時枯渇

「プリントアウトして宿題に回答する」という方法がとられたため、プリンター需要が拡大。一時欠品が出るほど購入された。逆に言えば、プリンターを常備している家庭が少ないことが今回初めて分かった。

■家庭の負担は少くない

普段使いのツールを使うといっても、すべての家にPCやタブレット端末があるわけではないので、端末を購入するという経済的な負担をしなければならない家庭があったことは事実である。また、学年が小さいほど、親が子供の学習支援に割く時間が長くなっている傾向が出てきている。3月末に行われたある調査によると、子供の勉強に親が付き添う時間は1日当たり何時間か? という問いに対する回答は以下のようになっている

- 1 時間以内 5.0%
- 1-2 時間 30.6%
- 2-3 時間 43.1%
- 3-5 時間 15.1%
- 5 時間以上 6.2%

感染予防措置が厳しかった時期は、親も在宅勤務だったので子供の面倒を見る時間があったが、業務再開で両親が会社に出勤する頃になると、オンライン学校で学習する子供に割く時間的余裕がなくなるといった問題が顕在化した。多くの家庭では、どちらかの親が早く自宅に戻り子供の教育を支援するなど、勉強に付き添う時間の確保に奔走した。

■電信会社のナイスプレイ

西藏自治区西部の昌都市波格村にいる学生が、オンラインで授業を受けるために電波が安定している雪山に上ってネットの電波を受信しているニュースが国内で流れた。このニュース知った中国移动通信は基地局を設置。電波環境を改善した。新しい基地局の建設コストは20~30万元。メンテナンスコストも高い。辺鄙な村だけのために新しい基地局を設置しても、その通信収入では商業的には成り立たないが、それでも道義上の理由でこの基地局の設置を決めたという。このようにオンライン学校を支援した企業は少なくない、前述の阿里巴巴（アリババ）はもちろん、大手IT企業のテンセント（腾讯）など枚挙にいとまがない。

■プラットフォーム構築ノウハウと普段使いツールを融合したオンライン学校

中国では小・中学生向け宿題解答と学習支援サービスに需要が顕在化しており、新型コロナ以前から「作業帮（Zuoyebang）」、「小猿搜题（yuansouti）」、「学霸君（xueba100）」などのプラットフォームに人気が集まっていた。しかし、これらは、学校の授業の支援をするものであり、学校の授業そのものをオンライン化するものではない。今回の新型コロナ感染期のオンラインプラットフォームはこれらの学習支援プラットフォームとは一線を画すものであるが、そこにはこれら各企業のノウハウや経験が多くつぎ込まれた。そして、中国人が普段使いしているツールにそれを展開して、実用的な「オンライン学校」を作り上げた。重要なのは、「普段使いのツールをどれだけ多く持っているか」である。日本は2000年のころはIT先進国だった。e-Japanやi-Japanなどの国家プロジェクトが目白押しで、生活や労働、また様々な産業分野でのIT化を進める実証実験が多くあった。しかし、それらは実証実験で終わってしまい、現在普段使いされているものは殆どない。翻って、中国の今はIT利用大国である。多くのソリューションやAPPが構築されプラットフォーム化されている。それが生活と産業に浸透している。そして、ここにAIやビッグデータなどの新技術開発と産業創発などを同時並行に実施し、中国のデジタル社会環境を更に骨太化するシナリオが描かれている。中央政府はこのような行動を積極的に支援し、実行局面に向けた着手が始まっている。そう考えると、新型コロナ感染期のオンライン教育プラットフォーム構築のアナロジーは、次の中国のIT環境を俯瞰する試金石になっているようにも見える。

（文責：横井正紀）